

# 算命学中庸

## 【初年】 4 1 回目

4 1 回目の授業はこのページからです。

授業科目           【十二大従星力学】 ②

・【初年】 4 1 回目【十二大従星力学②】 01

□ 十二大従星力学（じゅうにだいじゅうせいりきがく） ②回目

⇒ 天印星（てんいんせい）です。

天印星 — <sup>あかご</sup>赤子

胎児のつぎの時代は『天印星』です。

赤子の時代・赤ん坊の時代に星です。

赤ちゃんのすがたを想い浮かべるとわかりやすいです。  
赤ちゃんがいますと、そのまわりの人たちは、どのように感じて、どのように想うのでしょうか。

“赤ん坊の特徴ってなんだろう”と考えてください。

赤ん坊は [かわいい] [愛<sup>あい</sup>らしい] といえます。

### 赤ちゃん — かわいい

赤ん坊にだけにしか見ることができない、愛らしい姿をそなえています。

なんで赤ちゃんは可愛いのでしょうか？

なんで愛らしくみえるのでしょうか？

それは無垢<sup>むく</sup>で天真爛漫<sup>てんしんらんまん</sup>だからです。

赤ん坊に下<sup>した</sup>心<sup>ごころ</sup>はありません。

赤ん坊がニコッと笑うと「かわいい赤ちゃん」そうおもうのは“ほんわりとしたあたたかさ”を感じるからではありませんか……？ 悪質なたくらみがないのです。

無我の笑顔なので可愛いのです。

お偉いさんの愛想笑いとちがいます。

相手がどのような人物であろうと、赤ちゃんは楽しければ、満面の笑みをたたえ、きゃっきゃっと、喜ばしい声を発します。

いやなこと、嫌いなことがあれば、泣きだします。

それは無心・無欲で表情が変わりますから、可愛くみえるはずです。

赤ちゃんは **無我・無心**

俗念や邪心にまったくとらわれない **無我・無心** の存在というのが、赤ん坊の特徴といえます。

無心の存在を言い換えれば、天真爛漫とか、無邪気とか、あどけない、ともいえます。

赤ん坊はまだ物心がついていません。

参考・無垢 [心をけがす垢、煩惱がないさま]

参考・無我 [我というとらわれを離れ無心なこと。私心がないこと]

参考・無心 [俗念や邪心にまったくとらわれないさま]

参考・物心 [人の気持ち、世態、人間関係などわかりはじめる]

参考・天真爛漫 [うわべをかざることが少しもなく、ありのまま、心におもうままであること。無邪気なさま]

参考・無邪気 [邪よこしまなおもい、考えがないこと]

参考・思慮分別 [善悪・損得を判断する。正邪せいじゃをわきまえること]

“自分で意識してなにかをやる” という年齢には達していませんから、思慮分別しりよふんべつはないです。  
それゆえ、何事についても、無心の心持ちこころもでいます。

ライオン、虎とら、熊くまとかの猛獣も、赤ん坊の時代は可愛くみえます。

このことは人間でも、ほかの動物でもおなじで、幼いときは無心ですから、なにかを意識するとか、欲得や邪念をもっていないからでしょう。

[なにがあって] [なにがないのか] を知ろうともしない  
純粋じゆんすいなすがたです。

損得などの汚れがない、清らかさが赤ちゃんの身の安全につながります。

赤ん坊の無心でいる清らかさが保身につながる。

赤ちゃんのあどけないすがたを見ると、親はもちろんのこと、まわりの大人、そして子供さえも赤ん坊の面倒を看みたくなるわけです。

赤ん坊を取り巻く人は、笑う顔が見たい、赤ちゃんをあやして気を惹ひきたい、痛いところがあれば取り除いてあげたい、泣いている赤ん坊の心のおもいを汲み取って、泣き止やましてあげたいと心がうごかされます。

赤ちゃんの無心の姿に「かけがえのない姿すがたを大切にしたい」と想おもう母性本能的な気持ちわが湧いてくるわけです。

赤ん坊がわかってやっているのではない、邪気のない姿でいることが、自分の身をまもることにつながっているのです。

それゆえ、天印星をもっている人は、無心でいることが保身ほしんになります。

「無心」大人の場合は「無欲」といえるでしょう。

無心でいるすがたは保身につながり、



無欲でいるとまわりから好かれる。

「邪気のない無欲でいることは保身につながります」というふうに考えると、わかりやすいとおもいます。

この姿はまわりから好感をもたれます。

天印星をもつ人は、無心でいるとまわりから好かれるようになります。大切にされたり、困ったときにはまわりから助けてもらえたりして、保身につながっていきます。

反対に、天印星をもっている人物の<sup>よくとく</sup>欲得が強いとまわりから嫌われます。

『欲得』は物事全般にいえませす。

赤ん坊は「好かれよう」とおもっていません。ありのままのすがたです。まわりに何も求めず、邪念なく笑顔をみせるので、よけいに可愛いのです。

天印星をもつ人は、それとおなじ質をそなえています。そのことを基点にして考えてください。

参考・無欲〔欲張らない。むさぼりのないさま。人を押しつけてまで求める欲がないこと。欲深く物をほしがらないこと〕

参考・<sup>よくとく</sup>欲得〔欲深く物をほしがること〕

参考・意識 [自分がいま何をしているのか、どういう状況におかれているのか、はっきりわかる心の状態]

参考・感化<sup>かんか</sup> [強制することなく、自然に人に影響を与える]

いまの説明にも出てきましたが、天印星はまわりを感化するチカラをもつ星です。

**天印星には感化力がある。**

家に赤ちゃんがいるだけで、その家のなかの雰囲気が変わります。母親が乳幼児を畳に寝かせると、手足をバタつかせて、きやつ、きやつ、きやつ、と、はしゃぎ声を発すると、まわりの大人たちは、まるで陽<sup>ひ</sup>だまりのようなおらかな気持ちになったりします。

天印星はまわりの人の心持ち<sup>こころも</sup>を和ませるチカラ<sup>なご</sup>をもっています。

**その場の雰囲気を明るく、やわらかくするちからがある。**

参考・心持ち [物事を見聞き、何かを感じとった心の状態]

〔たとえば〕融通のきかない堅物<sup>かたぶつ</sup>のおじいさんでも、自分の孫とか、知り合いの赤ちゃんでも来ると、「〇〇ちゃんよくきたねえ」とか『イナイ、イナイバー』顔をしわくちゃにして見せたりします。

そこにいるだけで、こころをなごませたり、元気づけたり、こころにぽつと灯り<sup>あか</sup>をともし作用をもっているのが赤ん坊です。

人を元気づけて、おだやかな気持ちにさせる。

なにかほっとさせられます。

そういうチカラのある星が天印星です。

天印星をもつ人は、邪気のない下心がない、無心の心持ちでいるときには、他人<sup>ひと</sup>を感化<sup>かんか</sup>するチカラを発揮できる人です。ただし「無心」が条件です。

まわりの人に〔善<sup>よ</sup>い人だとおもわれたい〕とか、〔自分に注意を向けたい〕とか、そのような欲望や下心があると、裏目に出てしまいます。

参考・感化<sup>かんか</sup>〔人に影響を与えて心を変えさせること〕

参考・善良<sup>ぜんりょう</sup>〔特に、性質が正直で温順・素直なこと〕

☞ 赤ん坊は受け身のすがたです。

### 受け身の星

天印星は“受け身の星”といわれます。

赤ん坊は自分から食べ物を取りにいった、食べることもできません。着替えることもできないのです。

ほか  
他からのほたらきかけを受ける立場です。

お腹が空けば泣きますが、泣きながらミルクをくれるのを待っていなければならない受け身です。

これは母親なり、誰かに面倒を看てもらっている姿です。自分では何もできないので、世話をしてくれるのを待つわけです。

この受け身の姿は運勢のうえでもおなじだと考えます。

『待ちの運』といいます。

無心が保身につながる特質をそなえています。

### 受け身の星



待ちの運

天印星をもっている人は『待ちの運』です。  
赤ん坊は自分ではなににもできないので待っています。  
待っていると、まわりの大人が面倒を看てくれます。

天印星をもつ人は、待ちの質が運勢に備わっていますから、受け身でまっていたほうが、運勢がひらけるという特徴があります。

**受け身で待っていたほうが運勢はひらける。**

自分から進んで、なにかを起こそうとして動くよりも、  
待っていたほうが、運は向いてきます。  
そういう運勢の持ち主といえます。

〔たとえば〕 なにか仕事をしようとおもうときに、自分  
から進んで、あちこち探しまわってうごく、結果的に  
いい仕事が見つからないということになります。

それよりも受け身で待ったほうが、いい仕事のでてくる  
という運勢です。

⇒ 結婚もおなじです。

よい相手はいないかなと、自分で探すよりも待ちがよいのです。〔たとえば〕この人と想って、自分から積極的に働きかけて、相手の気を引こうとすると、かえって相手から嫌われるということが起こります。

天印星をもつ人は受け身で待っていると、自然に自分に合う人（釣り合う程度はあります）が現れるとか、相手のほうから近づいてくるようになります。

しかし〔待っていたら結婚できなかった〕そういうことも起こります。それは無心で待っていなかったからです。

〔待っていればよい結果がまわって来るから待つ〕このおもいは受け身ではないのです。

期待を<sup>いだ</sup>抱かないで「無我・無心」でなくてはいけないのです。これはとても難しいことです。

「天印星をもつ人は『無我・無心』ですよ」と、算命学で学んでも、天印星の〔よい面〕と〔悪い面〕を<sup>ふだん</sup>あっちに出し、こっちに出し、という生き方をする場合が多いです。不断の練習がものをいうのです。

いつも常に、なるべく無欲の状態にいるのです。

無欲の状態にいる自分に、なにかを求められたとしたら、その物事に対しても無心で行うのです。

〔たとえば〕仕事に対しても、会社から求められたことを無心で一生懸命やると、それは無欲で受け身です。

そのほうが出世するようになります。

自分から出世しようとか、手柄を立てようとして動くと、思い通りに物事が進まないで失敗します。

それがうまくいったとしても、まわりから妬ねたまれるとか、足を引っ張られるような状況になってきます。

なにごとにも、欲得なく「まわりから求められたことは、一生懸命に行う」つねにそういう心構えで、物事に対処していると、結果的に伸びていきます。

赤ちゃんの邪気のない無欲な姿を思い浮かべて、つねに気持ちをととのえる究極きゅうきょくを求められるのが天印星です。ほんとうに難しい星です。

参考：一生懸命いっしょうけんめい〔命がけで事にあたること。いちずな気持ちなること〕

参考：不断ふだん〔絶え間なく続くこと〕行動

参考：究極きゅうきょく〔ものごとをはてまできわめること〕

☞ もうひとつ天印星の大きな特徴があります。

### 養子の星

天印星は『養子の星』といわれています。

人間の一生のなかで、養子に行くのに最適<sup>さいてき</sup>な年頃<sup>としごろ</sup>がある  
とすれば、この時代です。

物心<sup>ものごころ</sup>もついていない時代ですから、どの家に養子に出さ  
れても、本人は悲しくないわけです。

赤ん坊なので、どのような親のところへ養子に行っても、  
その親を自分の親だとおもって育つことができます。

参考・物心〔人情・世の中のありさま・状態を理解する心〕

〔たとえば〕吉田茂は外交官・総理大臣を歴任した人物  
ですが、生まれてまもなく養子にもらわれます。

吉田茂の実父は〔竹内綱<sup>たけうちつな</sup>〕です。

子供のいない〔吉田健三<sup>よしだけんぞう</sup>・士子<sup>ことこ</sup>〕夫妻のところへ、生まれて数日  
後にもらわれて行きます。

吉田茂 1946(s21)年5月・内閣総理大臣に就任。

養父の吉田健三は日本初の新聞・東京日日新聞〔現・毎日  
新聞〕の設立・創刊<sup>そうかん</sup>に参画しました。

吉田健三（福井藩士）は、鎖国時代に英国船に密航して、英国へ渡っていますから、新聞の必要性を熟知していました。

実父・竹内綱の長男（竹内明太郎）は現小松製作所を創設。

＊ よしだしげる 吉田茂 1978(M11)-9-22 [1967-10-20 89歳没]

		偏母					
	癸	辛	戊		牽牛星	天恍星	6 壬戌
辰	卯	酉	寅	鳳閣星	龍高星	調舒星	16 癸亥
巳			戊	天貴星	鳳閣星	天報星	26 甲子
			丙				36 乙丑
	卯	辛	甲				46 丙寅
							56 丁卯
							66 戊辰
							76 己巳
							86 庚午

この宿命のなかに実母はいません。育ての母（<sup>へんぼ</sup>偏母）がいます。

大人になっても養子にだされた本人は覚えていません。

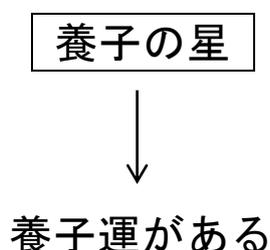
天印星は赤ん坊の時代ですから、どのような親のところへ養子に行っても、自分の親だと信じて育つことができます。養子先の人間に成りきれます。

しかし、小学生くらいの年齢になって、いきなり養子に行くような状況になるとすれば、実の親をわかっていまずから、養子先の家に慣れ親なしむひたのは難しいです。また、当たり前ですが、天報星（胎児の時代）に養子に行くことは不可能なわけです。

「三つ子の魂み百ごまでたましいひやく」といわれていますが、天貴星の時代に入ってしまうと、この時代に起こった事象は大人になっても忘れません。

天印星は一生のなかでもっとも養子に適する時代ですから、養子に行けば、養子先で養子になれます。

天印星は養子の星ですが、算命学的には“養子運”があるという意味になります。



『天印星をもつ人は、養子運があります』養子に関する占いのときに、このような言い方をします。

『養子運がある』それはどういう意味なのかといえば、養子になりやすい質をもっているのです。

天印星をもつ人が、必ずしも、他家の養子になるわけではありません。そうなるとは決まっています。

天印星をもつ人は、養子に行かなくても、養子のようになりやすいのです。

〔たとえば〕天印星をもつ夫の場合をいえば、妻の実家との関わりが深くなって、妻の親の面倒を<sup>み</sup>見るようになるとか、本当の養子ではないのですが、養子のような質をだすようになります。

〔たとえば〕妻の家の姓に<sup>みょうじ</sup>名字を役所に、登録して変えたとか、実際に養子ではなくても、そのような質をだすこともあります。

☞ 占うときは——つぎのところが大切です。

天印星は養子運があります。

養子運をもつ人を、実際に養子にもらった家はしっかりと安定してゆくようになります。

反対に—— 養子運のない人を養子にもらった家は、家運が衰退していくのです。

**養子運のない人を養子にもらうと家運が衰える。**

養子運をもたない人を養子にもらうと、その家は家業が衰えたり、子孫によい子供が生まれなくなったり、さまざまな出方がありますが、いずれにしても家運は崩れていくようになります。子供養子をもらう・婿養子をもらう。そのどちらも入ります。

養子運のある星は、天印星のほかにもあります。

天印星だけが養子運があるとはいえません。それゆえ、宿命を観たときに天印星がない「うちの婿養子は天印星がないからダメだ」と、そこだけでは決められません。

☞ 天印星のほかにも養子運をもつ宿命があります。

そのことについては、もう少し先になってからでてきます。

『養子運』の代表といえる星は天印星です。

天印星は〔<sup>あとつ</sup>跡継ぎ・<sup>あとつ</sup>後継ぎ〕には向かない星です。

天印星は後継ぎには向かない



家業の跡継ぎ

養子に行くのには向いていますが、自分の家の後継ぎには向きません。

このことは〔実家の後継ぎ〕です。

実家の跡継ぎに向いている星は、あとで出てきます。

そこで説明します。

参考・<sup>あとつ</sup>後継ぎ〔ただ後を継ぐのであれば後継ぎ〕順番として長男が父の後を継ぐ。

参考・<sup>あとつ</sup>跡継ぎ〔なにかが存在していて、その地位を継ぐ〕浩宮様は天皇家の跡継ぎ。

☞ 養子の星の話は、少し難しいところもありますので、宿命をつかって説明します。

＊ 美智子皇后

1934(s9)-10-20

	貫索星	天印星
玉堂星	調舒星	調舒星
天恍星	貫索星	天印星

＊ エリザベス女王

1926-4-21

	車騎星	天馳星
龍高星	龍高星	禄存星
天印星	鳳閣星	天印星

お二人を並べましたのは、お二人とも天印星が2つあります。天印星は宿命に1つあっても、養子的それは<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>当て嵌まりますが、2つあればその質が強くなります。

☞ エリザベス女王は長女に生まれ、男兄弟はいないので、自分が英国王室を継承して女王の地位につきました。

『天印星は後継ぎに向かない星』です。とっています。この部分が少し複雑な箇所なのです。

天印星は養子の星ですが、女性が天印星をもっている場合は、条件つきで、婿養子をもらうことは可能です。

参考：継承 [ひきつづいて、先代の地位・身分・財産・権利などをうけつぐこと]

エリザベス女王のように、女兄弟しかいなくて、しかも長女です。彼女のように婿養子をもらわなくてはならない立場になった場合、女性は婿養子をもらうことができます。それで天印星を消化<sup>しょうか</sup>できるのです。

天印星を消化〔天印星のもつ意味合いを自分の身についたものとする〕

星の消化（星の意味を完全に理解して、身についたものとする）

女性の天印星は婿養子<sup>むこようし</sup>をもらうことは可能ですが、



条件として、その婿に後継ぎになってもらう。

女性の天印星は婿養子<sup>むこ</sup>をもらうことはできますが、その

婿<sup>むこ</sup>さんに後継ぎ<sup>あとつ</sup>になってもらうという条件があります。

入り婿<sup>い むこ</sup>は女性からみれば夫<sup>むこ</sup>です。

夫に後継ぎ<sup>あとつ</sup>になってもらうのです。それが条件です。

なぜかといえば、天印星は後継ぎに向かない星ですが、

英国王室のように、女性が親の跡<sup>あと</sup>を継<sup>つ</sup>がなければならない

場合は、お婿<sup>むこ</sup>さんをむかえて、その入り婿<sup>い むこ</sup>に跡継ぎ<sup>あとつ</sup>の役目を果たしてもらうことが重要な条件になります。

☞ ふつうの民間の話であれば、〔たとえば〕天印星をもつ女性の親が会社を経営しています。〔娘しかいないので、お婿さんむこをもらいたい〕のであれば、婿養子むこをもらってそのお婿さん二代目の社長になってもらえばよいのです、ところが、イギリス王室はそういうわけにはいかないのです。英国王室には決まりがあります。

〔エリザベスに夫として迎えた婿養子に、王位継承権はないので、女性のエリザベスが王位を継承けいしょうするしかないのです〕

算命学は「王室の決まりは関係ない」のです。

〔算命学の法則に適応していなければ、その家系は衰おとろえていくようになります〕そういう占いになります。

エリザベス女王は、算命学の条件そくに則していませんから、家運が衰えるという出方になります。

この場合は家運が衰える。

家運が衰える……さまざまな出方があります。

天印星をもっているのが男性だとすれば、家運が衰えるというのは、家業が衰えると考えてよいです。

参考・継承<sup>けいしょう</sup>〔地位や身分、財産、権利、義務などを、ひきつづいて、うけつぐこと〕

参考・適応〔ある条件や要求などにあてはまること〕

参考・則<sup>そく</sup>する〔ある事柄を基としてそれに従う〕

⇒ 家運が衰えるということについてです。

主人公を女性として考えますと、女性は子供を産んで、家系に適合する人物に育てるという役目があります。

この意味合いが女性の場合はふくまれます。

それゆえ端的に言えば、天印星をもつ女性の場合には、子供の育ちが悪くなります。

女性の場合は子供の育ちが悪くなる。



子孫の育ちが悪くなる。

もっと大きな意味では、子孫<sup>しそん</sup>の育ちが悪くなります。

このことについては、もともと男の役目と女の役目にはちがいがあると、算命学では考えています。

算命学は、皇族だからとか、法律はこうだとか、男女平等だとか、そういう話とは別なのです。

〔たとえば〕天印星の女性が後<sup>あと</sup>を継<sup>つ</sup>いだとき、子供が1人も生まれないと、その家系は途絶えることになります。後継ぎが絶えてしまったことは、家運が衰えたことになります。

あるいは、後継ぎは生まれましたが、その子供が家系を乱すような生き方になってしまった場合、それも家運が衰えたことになります。

〔男の役目〕と〔女の役目〕はちがってしまっていて、英国王室のように女性の場合は“子供の育ち”にでてきます。

『子供の育ち』に関しては、英国王室のエリザベス女王の子供はみんな離婚しています。

王室の継嗣<sup>けいし</sup>（跡継ぎ）であるチャールズ皇太子もダイアナさんと離婚しています。

アン王女も離婚して、アンドリュー王子もセーラー妃と離婚しています。

皇族でありながら、不倫、離婚、そのような人たちがばかりです。端的（率直）に言えば、エリザベス女王に問題があります。子供の育ち方の事象を算命学で考えますと、母親の育て方が悪かったといえます。

さらになぜ——跡継ぎに向かない宿命の子供が生まれて来てしまうのか、それは上の代の責任なのです。

補足しますと、エリザベス女王の夫であるエディンバラ公には養子運がないのです。

『養子運のない夫』を養子にもらってしまえば、よけいに子供の育ちが悪くなるといえます。

そういう意味において、英国王室のチャールズ皇太子に嫁いだダイアナ妃も犠牲者の1人です。

ダイアナ妃は英国王室の子供運が悪い犠牲の部分を引き受けてしまったともいえます。

ダイアナ妃の場合はそれだけではなくて、彼女が〔6歳〕のときに母親が家を出たことも、ダイアナ妃の人生にはとても大きな影響を与えています。

そして、ダイアナ妃自身の宿命も関係しています。



＊ エディンバラ侯爵 1921-6-10 1921-4-9 [99 歳没]

	甲	甲	辛		牽牛星	天報星	2 癸巳
寅	辰	午	酉	石門星	司祿星	牽牛星	12 壬辰
卯	乙			天堂星	貫索星	天極星	22 辛卯
	癸	己		天印星はありません			32 庚寅
	戊	丁	辛				42 己丑
							52 戊子
							62 丁亥
							72 丙戌
							82 乙酉

＊ ダイアナ妃 1961-7-1 1997-8-31 [35 歳没]

	乙	甲	辛		車騎星	天馳星	2 乙未
辰	未	午	丑	祿存星	龍高星	祿存星	12 丙申
巳	丁		癸	天貴星	石門星	天印星	22 丁酉
	乙	己	辛				32 戊戌
	己	丁	己				42 己亥
							52 庚子

☞ 美智子様もエリザベス女王も天印星が2つあります。  
『養子』『養子運』ということで話を進めてきましたが、  
天印星をもっている女性がお嫁に行った場合はどうなる  
のでしょうか？

天印星をもつ女性がお嫁にいくと、その家の人になりきれます。  
天印星をもつ人が養子に行けば、養子先でよい養子にな  
れます。養子先ですっかりその家系の人になればよき養子です。

☞ いつまで経<sup>た</sup>っても養子先になじめないで、その家の人  
になりきれない人は、いい養子とはいえません。

このことは、お嫁さんの場合もおなじです。

男性の入り婿<sup>いりむこ</sup>を“婿養子<sup>むこようし</sup>”といいます。

女性が嫁いでも“嫁養子<sup>よめようし</sup>”とはいませんが理屈はおなじです。

つまり、天印星をもつ女性がお嫁にいけば、嫁<sup>か</sup>した家の  
人物になれます。すっかりその家の人物になりきれます。

天印星をもつ女性が、皇族に嫁いだ場合は、皇族として  
恥ずかしくない人物になれます。

美智子様の陰占宿命は「平民から貴族になれる」という特別な宿命に準じた宿命なのです。

美智子様の特別な宿命と、ほかの皇族の人物を比べたときに、美智子様はよりいっそう皇族としての人物になりきれます。美智子様は皇族としての雰囲気を十二分に醸<sup>かも</sup>しだしているといえます。

〔たとえば〕の話として、美智子様が一流の料亭に嫁<sup>か</sup>したのであれば、一流の料亭の女将になりきれるということです。

天印星にはこのような意味合いがあり、そういう質をもつ星ですから、〔養子にいくと〕または〔お嫁にいくと〕その家の人物になりきれます。

実<sup>じつ</sup>の両親をおぼえていない赤ん坊の時代の星ですから、どのような親のところ、どのような家に行っても馴染<sup>なじ</sup>めるわけです。

女性の場合お嫁に行けば、その家の人物になりきれますから、嫁いだ家に相応しいお嫁さんになれます。

ということは——長男のところへお嫁に行ったほうがよいのです。

長男のところに嫁いだほうがよい。



その家の中心的存在になれる。

なぜ長男なのかといえば——親とはまったく関係のない生き方をしているような、次男とか、三男に嫁いでも、天印星のよさを発揮できません。

長男のところへ嫁いだ場合は、まるでその家の娘のように、嫁いだ家の中心的存在になってゆきます。

このことも天印星の特徴のひとつです。

〔たとえば〕自分がその家の長男で、自分が家の<sup>あと</sup>を<sup>つ</sup>継ごうとおもうのであれば、天印星をもっているお嫁さんを迎えるとよいのです。そのお嫁さんが家のために一生懸命に尽くしてくれます。結果的に中心的存在になります。お嫁さんが家の中心的存在になってしまうと、夫のほう<sup>が</sup>婿養子<sup>の</sup>よう状態におかれてしまうことも起こります。

美智子様はつねに平成天皇に寄り添うようにしておられました。皆さまはいかに想われましたでしょうか……。

天印星をもつ美智子様は、実家(正田家)を継いでいません。  
天皇家へ嫁ぎました。

子供の育ちは悪くない。

美智子様のような生き方であれば、子供の育ちは悪くないのです。

エリザベス女王のような生き方をしてしまうと、子供の育ちが悪くなります。

天印星については、このように考えていただきたいのです。

⇒ 天貴星（てんきせい）です。

### 天貴星 — 児童〔3歳～小学生くらいまで〕

天貴星は児童の星です。

目安としては〔3歳〕くらいから、小学生くらいまでの子供を意味します。

天印星〔赤ん坊の時代〕と 天貴星〔児童の時代〕の違いはなにかとといえば、『物心』がついたのか、ついていないのかです。

だいたい3歳くらいになれば、子供の物心はつきます。

おそらく皆さまも、生まれてから0歳、1歳、2歳くらいまでの出来事は記憶にないでしょう。

それは物心がついていないからです。

2歳半くらいから物心がつく早い子供もいるかも知れませんが、個人差は別にしまして、物心がついていないということは、この世に生まれて来たのですが、人間としての精神がまだ完成されていない時代です。

母体から産まれるときに、すでに肉体は完成して、

母親の胎内から送り出されますが、赤ん坊の精神は未完成の状態です。「生まれてから3年くらいで精神が完成して幼心おさなごころが付きはじめる」と算命学は考えています。

地球上に生命いのちをうけて、3年くらいで精神は完成する

参考・物心〔人の気持ち、人間関係などがわかりはじめる〕

参考・幼心〔まだ判断力・理解力が十分ではない、子供のころ〕

☞ 「天 地 人」という言葉があります。

『気』でいえば……天気てんき・地気ちき・人氣じんき といいます。

天気 — 1年	} 宿命(1)天地人
地気 — 1年	
人氣 — 1年	

生まれて3年で「天 地 人」の『気』がそなわる。

生まれてきて、最初の1年で『天気』がそなわります。

つぎの1年で『地気』がそなわります。

つぎの1年で『人氣』がそなわります。

生まれて3年で「天 地 人」の3気がそなわります。

生まれてから3年で「天地人」の『気』が子供のなかに  
しっかり入ります。それゆえ、3歳になると誰でも物心  
がつくと考えています。

そして—— 宿命（2）五行の気

木気（もつき）	}	〔五行の気〕
火気（かき）		
土気（どき）		
金気（きんき）		
水気（すいき）		
		生まれて5年で〔五行の気〕が そなわる。

五行〔木火土金水〕の気をそれぞれ〔木気〕〔火気〕〔土木〕  
〔金気〕〔水気〕とといいます。

これらの五気も1年毎に、1つずつ子供にそなわって  
いきますから、生まれてから5年で〔五行の気〕がすべて  
人体に整う（備わる）と考えています。

さらに—— 宿命（3）陽気・陰気

五行の気〔木気〕〔火気〕〔土木〕〔金気〕〔水気〕のほかに、

ようき  
陽気（太陽の気）

いんき  
陰気（月の気）

陽気と陰気という（陰陽の気）も加わります。

五行の気 [木<sup>もつき</sup>気] [火<sup>かき</sup>気] [土<sup>どき</sup>気] [金<sup>きんき</sup>気] [水<sup>すいき</sup>気] のほかに……

陽<sup>よう</sup>気 (太陽の気) と 陰<sup>いん</sup>気 (月の気) がそなわります。

宿命 (4) 七曜の気

五行の気 [木気] [火気] [土木] [金気] [水気]

陽気 (太陽)

陰気 (月)

生まれて 7 年で

七<sup>しちよう</sup>曜の気が人間

にそなわる。

五行のほかに、陽気と陰気がそなわるには、7 年かかります。

七<sup>しちよう</sup>曜といい、(七)(五)(三) の原理になっています。

生まれて 3 年 — 天地人の気がそなわります。

生まれて 5 年 — 五行の気がそなわります。

生まれて 7 年 — 七曜の気がそなわります。

☞ 昔の中国では、子供が生まれて 3 歳になると、七五三の最初のお節句を<sup>おこな</sup>行ったのです。

それは天地人の気が、その子にそなわったというお祝いです。

5 歳になると、五歳のお節句を行いまして、五行の気が

そなわったというお祝いです。

7歳になると、七曜の気がそなわったというお祝いをしました。7歳まで生きてくれば、自然界のすべての気が備わりますからこの子は成人するまで生きていける。と考えて、7歳になったときに正式な名前をその子供に与えたそうです。

それまでは愛称で呼んでいて、7歳のときにきちんとした名前をつけてあげたわけです。

当時は、新生児が亡くなる確立が、<sup>いま</sup>現在よりもはるかに高くて、小さい子供が病気を<sup>い</sup>してすぐ死ぬ。ということは多々あったそうです。日本もおなじでした。

7歳まで成長すれば、<sup>よほど</sup>余程のことが起きない限り、成人するまで生きていけるという意味をこめて、7歳になると、最後のお祝いをしたのです。

いつの頃か不明ですが、この<sup>ふうしゅう</sup>風習が日本に伝わり、日本では、女の子は3歳と7歳、男の子は5歳だけです。

昔の中国では、男女に関係なく、3歳、5歳、7歳を祝ったそうです。この話は男女の性別に関係ありませんので、男の子でも女の子でも、お祝いをおこなってかまわないのです。

⇒ 話をもどします。

天貴星のひとつ手前の時代は赤ん坊の時代でした。

赤ん坊は無心で無欲、天真爛漫で意識して行動しているのではなくて、無意識のうちにさまざまな行動を起こします。それは赤ん坊の時代の善<sup>よ</sup>さであり特徴でした。

天貴星はだいたい七五三を<sup>むか</sup>迎えるくらいの子供の時代です。3歳くらいから小学生までの子供の時代を想像するとよいでしょう。

昔は——生まれて3年くらい経過すると、天地人の気がそなわって、人間としての精神も完成して、物心がつく時代と考えていました。

天貴星 ⇒ <sup>ものごころ</sup>物心がつく時代

天貴星の時代になると、はっきり人間しての精神が確立して、自意識が芽生えます。

自意識が芽生える。

赤ちゃんの時代と違って、天貴星の年齢になると、自分の意識がそなわって、自分の意見を言うようになります。

「わたしはこうしたい……」というようにもなりますし、

「こうじゃなきゃイヤ……」と駄々<sup>だだ</sup>を捏ね<sup>こ</sup>たりすることもありますし、「バカ」とか、「おまえなんかきらいだ」とか、大人にむかって悪口をいったりする子供も出てくるようになります。

自意識がそなわってきたのです。

その自意識のなかでも、特筆すべきなのは『自尊心<sup>じそんしん</sup>』だと算命学は考えています。

## 自尊心

赤ん坊のときは無邪気・無心であったのに、物心がついて、まわりから自分がどのように想<sup>おも</sup>われているのかを、意識して行動するようになっただけではなくて、天貴星の時代は自尊心をそなえるようになります。

参考・自尊心 [自分の尊厳を主張して、他人の干渉を受けないで、品位をたもとうとする心理・態度。プライド]

天印星は赤ん坊ですから、記憶は残っていません。

天貴星の物心がついた時代になると記憶は残ります。

天貴星の時代は記憶が残ることに加えて、そのうえに重要なのは、自尊心だと考えています。

端的に言えば、赤ん坊は恥ずかしいとかの感情はまったくないわけです。つまり自尊心がないのです。

天貴星の物心がつく年齢になると、はっきりと自尊心がそなわります。

天貴星の年代は純粹であるために一生のなかでもっとも自尊心が強い。そのように算命学は考えています。

大人の自尊心よりも、このころの子供の自尊心のほうが、強いのです。天貴星はプライドの高い星です。

天貴星は自尊心をそなえる時代



プライドの高い星

子供だからプライドは低いとおもったら大間違いです。  
天貴星のプライドのほうが、大人よりも高いのです。

〔たとえば〕昭和 30 年代の小学生と、平成時代の小学生とでは『恥ずかしい』という気持ちの感じ方にかなりの相違があるようです。昭和 30 年代の小学生だと、遅刻して授業がはじまっている最中に、後ろから教室に入っていくことには、かなり恥ずかしいという気持ちがあったそうです。あるいは、先生に怒られて、廊下に立たされていると、恥ずかしい気持ちがあったのです。

平成時代になると、立たされるようなことはなかったでしょう。立たされたら生徒が文句をいうかもしれません。

さっこん  
昨今は幼児虐待・児童虐待の報道が多いです。

天貴星の時代に親から虐待されたとか、自尊心をひどく傷つけられたとすれば、どのようになるでしょう。

〔たとえば〕親が 4 歳の子供をはだかにして、外へ出して一晩中そのままにした。親は子供が 4 歳だから覚えていない。とおもったとしたら大変な間違いです。

4 歳くらいの子供を折檻せっかんだといって、一晩中、はだかにして外へ出したら、一生その子の心に傷が残ります。

この時代は強烈な傷跡がこころに残ってしまいます。

その心の傷が犯罪へとつながっていくこともあります。。

✽ 加藤<sup>ともひろ</sup>智大 1982-9-28 秋葉原無差別殺人・犯行事〔25歳〕

甲	己	壬		龍高星	天印星	4 庚戌
子	寅	酉	戌	貫索星	牽牛星	14 辛亥
丑	戊		辛	天禄星	司禄星	24 壬子
	丙		丁			34 癸丑
	甲	辛	戊			44 甲寅
					<b>車騎星の大運</b>	54 乙卯

加藤智大は5歳の頃、3歳の弟の手を引いて3～4キロある祖母のところへ家出したことがあります。母親と父親にひどく怒られて、「出ていけ」といわれたらしいのです。

彼は天貴星の時代にこのような事がたびたび<sup>あ</sup>遭ったようです。

彼の主星は〔牽牛星〕です。牽牛星はプライドの星です。

4歳からの大運でも、車騎星（自尊心の星）がまわっています。

〔牽牛星〕〔車騎星〕がもつ質を考えても、彼のこころは回復できないほどに、切り裂<sup>きり</sup>かれて傷ついたのでしょう。

ここでは説明をしますが、彼が無差別殺人を犯した<sup>よういん</sup>根本的要因は両親にあるのです。 参考：要因（物事の成立に必要な原因）

天貴星は自尊心が強くて責任感も強い星です。

**責任感が強い。**

小学校・低学年のときに宿題をだされたら、それをやらなくてははいけない。とおもったはずです。

それが中学生くらいになると、わざと宿題をやらないとか、担任に反抗して学校に行かないとか、そのようなことも起こるでしょう。

天貴星の時代にはそういうことはないと考えています。

まったくないとは言いきれませんが、天貴星は与えられた責任を果たさなくてははいけないと自覚して、一生懸命やろうとします。

そういう星ですから責任感がとても強いです。

「やらなければ自分の自尊心にかかわる」と意識するわけです。

責任感が強いという質が家系のなかにおいて発揮されますと、長男としての役目意識となります。

**家系においては、長男としての役目意識となる。**



**長男の星・後継ぎの星ともいわれる。**

『天印星は後継ぎに向かない星』という意味がありました。  
『天貴星は後継ぎに向いている星』です。

もし宿命に天印星と天貴星の両方をもっているとすれば  
〔長男に生まれたのか〕〔次男に生まれたのか〕〔女の子に生まれたのか〕それによって意味合いが変わります。

天貴星には後継ぎの星・長男の星という意味があります。

もう少し後<sup>あと</sup>にでてきますが、〔天庫星<sup>てんこせい</sup>〕という星があります。  
天庫星<sup>てんくらせい</sup>は『長男の星』という意味が最も強い星です。

天庫星（長男の星）

天貴星（後継ぎの星・長男の星）

☞ 私たちは〔天庫星<sup>てんこせい</sup>〕を〔てんくらせい〕と言っています。

なぜかといえば、天胡星（てんこせい）という星がありますから、その星と区別するためです。その天胡星も（てんゆめせい）と言っています。

言い方を変えることで、即座に星を区別できるようにしています。

星を間違えると、占いの答えが変わってしまいます。

書けば違いは判りますが、言葉で伝える場合は、〔天庫星 てんくらせい〕

〔天胡星 てんゆめせい〕と区別しています。

☞ [長男の星] と [後継ぎの星] の<sup>みかた</sup>観方につきましては、  
天庫星（てんこせい）<sup>てんこせい</sup>の箇所ですとまとめて説明します。

つまり [長男の星をもっている人物が、次男に生まれた場合にはどうすればよいのか?] [女の子が長男の星をもっていた場合はどうなるのか?] というふうに、それぞれの状況にわけて説明する必要があります。

このような事柄をまとめて、天庫星（てんこせい）のところで、ご説明します。それまでお待ちください。

☞ 天貴星の時代は、ほかのどの時代の星よりも優れている質があります。ほかのどの時代の星よりも勝っているのは、知識を吸収するチカラ『記憶力』です。

一生のなかで記憶力が最も優れているのはこの時代です。

若い人は記憶力がいいね。歳をとると記憶力が落ちてくる。とかいいますが、若い人よりも子供のほうが記憶力はすぐれています。

[たとえば] あのころは〇〇ちゃんと遊んでいたとか、ふざけていたら親に叱<sup>しか</sup>られたとか、先生に怒られたとか、天貴星の時代は、些細<sup>ささい</sup>なことでも覚えているはずですよ。

しかし、大人になると、「昨日はなにをしていたのか」

「さっきはなに食べたっけ……」と、思い出せないようなことがあったりして、記憶力はだんだん衰えてきます。

児童の時代は覚えようと意識しなくても、頭に入ってきてちやう。そのように記憶力がよい時代です。

天貴星は「知識欲」があると同時に「記憶力」の星です。

こうきしん 好奇心がつよく、ちしきよくおうせい 知識欲旺盛で記憶力がよい。

好奇心・知識欲が盛んで記憶力もよいのです。

この年頃の子供は「わからない事柄があると」すぐに、「どうして——」とか「なんで……」とか、問いかけてきて、大人に訊きたがります。

それくらい知識欲に満ちあふれています。

この時代に学び取ったものは、ほとんどの場合、記憶に残ります

このことは、天貴星がほかのどの時代の星よりも、すぐれている資質です。

端的に言えば「天貴星は記憶力のよい星」です。

しかし、記憶力はつかっていないと鈍化<sup>どんか</sup>します。

このことは前にも「考え方」として出てきました。

腕<sup>うで</sup>と脚<sup>あし</sup>を比較すると、脚のほうが何倍も筋力が強いのですから、脚のほうを重点的に使わないと、身体がバランスを保持できなくなります。毎日何キロ歩いたほうがよい。という話にもなってきます。

足<sup>あし</sup>・脚<sup>あし</sup>をつかわないで、朝から晩まで坐り<sup>すわ</sup>っぱなしで、作業の仕事を続けていたら、体調が崩<sup>くず</sup>れてくるはずですよ。脚のほうが強いから、脚をつかいなさい。というのとおなじで、記憶力が強いから、記憶力をつかうとよいのです。

記憶力がよい星ですから、つねになにか勉強したりして、頭を活動させて、知識の習得をきなさい。という資質が天貴星に与えられています。

それなのに頭をつかわないでいると、記憶力がふつうの人よりも鈍ってしまうのです。

参考・端的 [てっとりばやく要点をとらえる]

参考・鈍化 [にぶってくる]

頭をつかって、つねに知識の習得を心がけてください。

それは勉強という形でなくても構いません。

「なにか趣味をやっている」でもよいのです。

映画が大好きなので、なにかしら映画を観て、さまざまな知識を蓄<sup>たくわ</sup>えています。それでもよいのです。

天貴星は知識欲が旺盛で記憶力もよいです。それを活かさない<sup>い</sup>と、宿命から外<sup>はず</sup>れてしまうことになります。

「頭がよい人ほど、頭をつかわなければいけません」というふうに考えてください。

記憶力のよい資質をつかわない生活は、役目を果たしていないのとおなじです。

天貴星をもつ人物はどのような道へ進んでも、あるいは、どんな仕事に就<sup>つ</sup>いても、つねに頭脳を働かせて、知識の習得を心がけて生きることです。

それをすることで、本人自身も満足できる人生になりますし、運勢も伸びていきます。

星を輝かせるには、その星がもつ資質をつかうことです。

星は生きていますから、つかわないと星が腐<sup>くさ</sup>ります。

不快な匂いを放たないのでわからないのです。

星が腐ると、人生そのものが不満足になります。

運勢も下がってしまうことになります。

少し具体的にいえば、せっかく与えられている星を活かさないでいると、不平不満が多くなって、欠点ばかりを出すようになります。欠点は腐った星の匂いです。

☞ どのような出方になるのかといえ、さきほど天貴星は自尊心の高い星です。といたしました。

頭をつかって、知識の習得を心がけないといけません。

このことは、さまざまな事柄の成り立ちを知らないで、通り過ぎてしまうこととおなじといえるでしょう。

せっかくの記憶力を無駄にして、知識の習得をしないで

過ごしてしまうと、自尊心の星でプライドが人一倍<sup>ひといちばい</sup>高いですから、見栄を張ってしまっ、知ったかぶりをする

とか、嘘<sup>うそ</sup>を吐<sup>つ</sup>くとか、そのような出方になっていきます。

子供でもそういう欠点を出すときがあります。

「宿題やってこなかったの……」と訊くと、その子供にとっては「やってこなかった」と答えると、自分のプライドが傷ついてしまうので「やったんだけど、家に忘れてきました」というわけです。

あるいは、物にしても、みんながもっているのに、自分だけもっていないと思われるのは嫌だから、もっているふりをする。子供にはそのようなところがあるでしょう。

それとおなじで、大人になってからも、見栄を張るとか、知ったかぶりをするとか、悪くすると“嘘を吐く”などの欠点がでてしまいます。

天貴星のもつ特質を発揮していないと、欠点が出るようになって、それがマイナス要因になるのです。

いつか嘘はばれてしまうでしょうし、知ったかぶりをしていたら、それもばれるときが来るでしょう。

そのことに起因して、まわりの信用を失って、嫌われてしまい、孤立するようにもなります。

人生そのものが“生きにくく”なっていきます。

その結果として、運氣も不成功のほうへ傾きますから、不満の多い人生になってしまうのです。

そのようにならないために、知識を蓄えてゆくことが、求められます。

⇒ 天貴星をもつ人は年齢に関係なく、なにか——不明な事柄があれば、他人ひとに教えてもらおうとか、自分で調べて知識を身につけるとよいのです。

つねに知識欲を旺盛おうせいに保つことによって、人格じんかくも立派になってゆきます。

まわりからも認められて、運勢も伸びて行きます。

参考：人格（人の性格。人の品格。人間性）

【初年】 4 1 回目【十二大従星力学②】 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】 4 2 回目【十二大従星力学③】です。